

精神保健福祉相談援助の基盤

問題 21 精神科病院を退院したAさんは、次第に昼夜逆転した生活となり、バランスの取れた食事もできていない状況にあった。精神科病院のB精神保健福祉士は、受診時にAさんと相談室で面接を行い、生活のリズムを整えることがAさんのために必要だと考え、デイケアの利用を勧めた。しかし、Aさんは、「デイケアには行きたくない。自分は退院しているし、やりたいことがある」と語った。B精神保健福祉士はAさんの思いを聞きつつも、Aさんの生活に不安を感じ、これからどのように関わっていけばよいか悩んだ。

次のうち、B精神保健福祉士が抱く倫理的ジレンマとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 クライエントの利益と所属機関の利益
- 2 秘密保持とプライバシー
- 3 自己決定とパターンリズム
- 4 バウンダリーとクライエントの利益
- 5 専門職的価値と個人的価値

問題 22 日本のソーシャルワークの形成過程に関する人物と事項の組合せとして、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 仲村優一 —— 生活臨床
- 2 浅賀ふさ —— 医療ソーシャルワーク
- 3 竹内愛二 —— 社会事業と精神衛生
- 4 村松常雄 —— 治療共同体
- 5 窪田暁子^{くぼたあきこ} —— 福祉文化論

問題 23 U精神科病院には、病状が安定した後も入院を継続している精神障害者が多数在院しており、地域移行が早急な課題となっている。しかし、地域移行の重要な社会資源であるグループホーム設立に対して、地域住民からの反対があった。その対応のため、U精神科病院のC精神保健福祉士と管轄する保健所のD精神保健福祉相談員(精神保健福祉士)は関係者に呼びかけ、関係機関で協議の場をもつこととなった。その中で、精神障害者が安心して生活できる環境を整えることの必要性が確認された。C精神保健福祉士は、精神障害者への理解を促すために、地域行事での交流や地域住民を対象としたメンタルヘルズ講座の実施を提案した。

次のうち、C精神保健福祉士が意図したこととして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ソーシャルプランニング
- 2 ソーシャルエクスクルージョン
- 3 ソーシャルエンタープライズ
- 4 ソーシャルインクルージョン
- 5 ソーシャルリサーチ

問題 24 精神保健福祉士が関わる活動に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 従業員支援プログラム(EAP)は、従業員の心の健康への配慮を行い、生産性を高めるための活動である。
- 2 アルコールリハビリテーションプログラム(ARP)は、アルコール依存症の離脱症状の出現時に行われる。
- 3 個別職業紹介とサポート(IPS)は、職業前評価や訓練を行ってから就労につなげる活動である。
- 4 包括型地域生活支援プログラム(ACT)は、多人数の精神保健福祉士で構成されるチームで行う。
- 5 専門職連携教育(IPE)は、福祉、保健、医療に関わる各専門職の技術結集による相談援助である。

問題 25 精神保健福祉士が行う相談援助活動に関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 クライアントが参加するセルフヘルプグループの活性化を図るために、グループの管理運営を主導する。
- 2 クライアントが抱えている生活課題を解決するために、プロセスよりも結果を重視した支援を行う。
- 3 クライアントの生活障害の程度を見極めるために、その生活障害を固定的なものとして捉えたアセスメントを行う。
- 4 クライアントの病気がストレスにより再燃することを防止するために、コーピングスキルの獲得を支援する。
- 5 クライアントの主体性を尊重するために、人間関係や社会との関係ではなくクライアント個人に視点を絞った支援を行う。

問題 26 次の記述のうち、2013年(平成25年)の「精神保健福祉法」改正として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 都道府県による精神科救急医療体制の確保について規定された。
- 2 精神医療審査会の委員の構成について、精神障害者の保健又は福祉に関する学識経験者が規定された。
- 3 医療保護入院等のための移送制度が創設された。
- 4 一定の要件に該当する精神科病院に対して、任意入院者の病状等の報告を求めることができるようになった。
- 5 「精神分裂病」の呼称が「統合失調症」に変更された。

(注) 「精神保健福祉法」とは、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」のことである。

問題 27 次の記述のうち、精神障害者の権利擁護を行う際の調整機能の説明として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 クライエントのニーズと制度を結び付けるために、仲介・媒介することである。
- 2 法制度の改正・改革に向けた活動や、新たなサービスづくりを行うことである。
- 3 クライエント自身に、自らのニーズと権利に気付きをもたらすことである。
- 4 自分の権利主張が難しい状況にあるクライエントを支援することである。
- 5 多様な立場の人々に対して、精神障害に関する理解を求めることである。

問題 28 次の記述のうち、精神保健福祉士が行うコミュニティソーシャルワークの説明として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 精神障害者に対して、最適なサービスを迅速かつ効果的に提供できるようサービスの調整を行うことである。
- 2 集団活動の経験を通して、精神障害者個人の生活問題への対処能力を高める援助を行うことである。
- 3 生活課題を抱える精神障害者や家族への個別援助と、生活環境等の改善やまちづくりを並行して行うことである。
- 4 精神障害者が直面する社会的不平等に対して、地域住民の組織化など集合的なアクションで解決を図ることである。
- 5 多様な専門職が専門性をいかしながら、共通の目標の基に連携・協働して精神障害者への援助を行うことである。

問題 29 精神科医療チームにおける多職種連携のモデルや機能に関する次の記述のうち、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 インターディシプリナリ・モデルは、他のモデルより課題達成のために多職種間で役割を横断的に共有することが多い。
- 2 マルチディシプリナリ・モデルは、階層構造の中で医師の指示・指導の下に各職種がそれぞれの専門性を発揮する。
- 3 トランスディシプリナリ・モデルは、階層性はないが各職種の役割はおおむね固定されている。
- 4 メンテナンス機能は、目的の一致、役割と責任の相互確認及び情報共有を基本にチームの維持を図ることである。
- 5 タスク機能は、チームの中に生じる誤解や葛藤に対応するコンフリクトマネジメントをすることである。

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 1)

次の事例を読んで、問題 30 から問題 32 までについて答えなさい。

[事 例]

ある日、精神保健福祉センターに勤務する E 精神保健福祉相談員(精神保健福祉士)(以下「E 相談員」という。)のもとに、F さん(35 歳、女性)が相談に訪れた。来所目的を尋ねると、「夫のことで困っているんです。誰にも話せないと思っていましたが、裁判でお世話になった弁護士にこちらを紹介され、勇気を出して相談に来ました」と小さな声で話した。夫の G さん(35 歳)は、薬物所持で起訴されて執行猶予の判決を受け、現在は仕事を辞めて自宅にいるという。E 相談員は、「夫は相談と一緒に来ようともしないし、どうしてよいか分からない」と涙を流す F さんの話を聞いた。(問題 30)

F さんは、「これからどうなるか分からないけれど、夫のために、妻としてできることは頑張りたい」と話し、「二度と薬物に手を出さないよう、監視するのが妻の責任だと思います」と厳しい表情を見せた。このような F さんに対して、E 相談員は相談を継続することと、精神保健福祉センターで開催している心理教育を中心とした家族教室への参加を提案した。(問題 31)

それから約 3 か月が経過したある日、F さんは夫の G さんを伴って相談に訪れた。E 相談員が G さんに来所の理由を尋ねると、「妻が非常に心配しているので、安心させるために仕方なく来ただけです。精神科病院では薬物依存症と診断されましたが、自分は病気だと思っていません。もう二度とクスリは使用しない自信もあるので、相談の必要は感じていないです」とぶっきらぼうに答えた。

F さんが家族教室に参加したり、E 相談員との相談を繰り返す中で G さんも徐々に心を開き、「早く以前のように働いて妻を安心させたいけれど、今仕事を始めるとストレスがたまって、またクスリに逃げてしまう気がする。最近、気が付いたらクスリのことを考えているときがあり、正直このままやめ続ける自信がない」と複雑な思いを口にするようになった。(問題 32)

問題 30 この段階のFさんに対するE相談員の対応として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 失業に伴う経済的な困窮を避けるため、早く就職させるよう伝えた。
- 2 これからのことを一緒に考えたいので、もう少し話を聞かせて欲しいと伝えた。
- 3 直接話を聞きたいので、本人を連れてくるよう伝えた。
- 4 再犯の可能性が高いので、早く離婚の手続きをとるよう伝えた。
- 5 薬物依存症という病気であり、治療が必要であると伝えた。

問題 31 次の記述のうち、E相談員がFさんに家族教室への参加を提案した意図について、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 Gさんを監視するための具体的な方法を学んでもらう。
- 2 Fさんが共依存という疾患にかかっていることを気付いてもらう。
- 3 妻としての責任をより強く自覚してもらう。
- 4 イネイブラーとしてGさんを支える方法を学んでもらう。
- 5 Gさんの主体性を大切にしたり関わり方について考えてもらう。

問題 32 この時点で、E相談員がGさんに行う助言として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 更生保護施設に入所して薬害教育を受けること。
- 2 公共職業安定所(ハローワーク)に通い求職活動を開始すること。
- 3 保護観察所で専門的処遇プログラムを受けること。
- 4 ナルコティクス・アノニマス(N A)に参加すること。
- 5 ナラノン(Nar-Anon)に参加して12のステップを学ぶこと。

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 2)

次の事例を読んで、問題 33 から問題 35 までについて答えなさい。

〔事例〕

Hさん(26歳、男性)は、融通が利かず冗談を真面目に受け取ってしまい、場に合った行動をとれないため、人付き合いが苦手であった。対人関係でうまくいかないことはあったが大学を卒業し、就職は志望通りの会社に決まった。配属先では、パソコンでの作業が中心で、自分のペースで仕事を進めることができた。上司Jさんは、Hさんに仕事について丁寧に説明し、本人が納得するやり方で仕事ができるように配慮していた。Hさんの良さをJさんが評価していたこともあり、粘り強い姿勢や集中力は、同僚たちからも一目置かれるほどだった。Hさん自身も仕事にやりがいを感じていた。(問題 33)

就職4年目に大きな変化が起こった。新しくKさんが上司として赴任し、部下の一人一人に目標を考えさせ、臨機応変に動くように求めた。また、Hさんは初めて新入社員の教育担当係となり負担が増えた。自分でどうしてよいか判断に困ったHさんは、ささいなミスが続き、不眠にも悩まされるようになった。Hさんの変化に気付いた同僚が、かつての上司Jさんに連絡した。心配したJさんは、Kさんに相談した上でHさんから話を聞き、一緒に職場の健康管理センターを訪れた。落ち着きなく、「すぐにも退職したい」と訴えるHさんに、L精神保健福祉士が初回面接を行った。

その後、Hさんは、家族に付き添われVクリニックを受診し、広汎性発達障害の診断を受け、休職をすることになった。休職中もHさんは、L精神保健福祉士との面接を継続していたが、Hさんは、「何をしてもうまくいかない」と繰り返し訴えていた。

(問題 34)

Hさんは、Vクリニックの発達障害の治療プログラムに参加し始めた。休職から4か月が過ぎ、「自分で考え臨機応変に動くのは苦手だが、手順が分かる仕事は人より得意だ」と話すようになった。主治医から復職許可も出て、笑顔が見られるようになったHさんは、「そろそろ仕事に戻りたい」とL精神保健福祉士に語った。(問題 35)

問題 33 この時点で、Hさんが職場で経験していた状態として、適切なものを1つ
選びなさい。

- 1 ストレスコーピング
- 2 モデリング
- 3 クライシスインターベンション
- 4 ワークビリティ
- 5 ナチュラルサポート

問題 34 L精神保健福祉士が、この時点で行う援助活動として、適切なものを1つ
選びなさい。

- 1 ネットワーキング
- 2 ピアサポート
- 3 エンパワメント
- 4 ケアマネジメント
- 5 コンサルテーション

問題 35 L精神保健福祉士が、この時点でHさんに行う提案として、適切なものを
1つ選びなさい。

- 1 リワークプログラムに参加して、さらに訓練を続けてみましょう。
- 2 もっと他に自分に合う仕事がないか、探してみましょう。
- 3 もう少し休む期間を延ばすよう、お願いしてみましょう。
- 4 職場で配慮してもらいたいことを、自分で整理してみましょう。
- 5 Kさんの異動願いを、人事部に相談に行きましょう。